

多様な岩石・花崗岩

～大阪城の石垣となった岩石～

唐津湾を見下ろす浮岳、その左前方に立つ十防山、それにつながる七山は、背振山から続いている花崗岩地帯である。この花崗岩の嶺には観音の滝、猪掘の滝などのいくつもの小さな滝があり、やがて小さな流れとなり上流から中流へ、中流から下流へと両岸の花崗岩を削って玉島川につながり。アユ釣りやシロウオが獲れる玉島川は、両岸から川床まで大小様々の花崗岩の露出した美しい川である。やがて川は唐津湾に注ぎ、運ばれてきた花崗岩の細粒が堆積した白砂の美しい海岸に。白砂青松の虹の松原は、クロマツと共にこの風化した花崗岩が白砂を作りだしている。

この玉島川を南に見下ろす標高約190mの黒田山山頂に、昔から谷口石切丁場（浜玉町谷口）といわれる石切丁場跡がある。石切丁場とは、城の石垣を築くために、石垣石材を切り出すための丁場のことである。ここでは、これまで地元で「太閤石」と呼ばれていた巨大な石材や、矢穴が残る石材が確認されている。

この谷口石切丁場跡で、平成20年4月からの数回の調査で、石垣角石と思われる方形角石が4石確認される。石垣を築くときに、石垣面に使われる石材を「築石」、隅角部（出角というコーナー部分）に用いられる石材を「角石」といわれる。

谷口石切丁場跡では、石垣角石と思われる方形石材が4石確認される。4つの方形石材は約150cm×約140cm×約400cm（約5尺×約4尺6寸×約1丈3尺2寸：推定重量22～23トン）とほぼ同規格のものである。その他、この方形石材の周辺には2m以上の大きさのものや、石を割るときに出る10～20cm大の小さな端材（コッパ）も多数出ている。

石垣普請には石垣を築くための膨大な量の石材が必要となる。多大な経費と労力、期間を要する石垣普請において、石垣石材をいかに素早く、効率よく、安価に入手するかが、各大名の藩経営に直結する重要な課題であったようである。

幸い、唐津地方には石材になる玄武岩、花崗岩が広く分布している。背振山から延びる黒田山を含めたこの辺一帯の丘陵地は花崗岩からなり、周辺では巨大な花崗岩の露頭が見られる。谷口石切丁場には高さ5mほどの花崗岩露頭があり、こうした露頭を母岩として豊富な石材が供給できたものと考えられる。また、谷口石切丁場跡の周辺には、古くから人々がいた痕跡が残されている。多大な労力も十分賄えたものと考えられる。

◎エピソード・伝承・うんちく など

地元で「太閤石」と呼ばれていた巨大な石材が、豊臣秀吉によって築城された名護屋城（唐津市鎮西町名護屋）の石垣に用いられたこと、また、時代が下り、唐津初代藩主寺沢志摩守のころ、「大阪城公儀普請のため」に、唐津から石材を搬出したことが裏付けされている。谷口石切丁場跡の巨大な方形石材群を眼前にすると、花崗岩の特性と価値を巧みに利用してきた、先人たちの叡智と自然のすばらしさに驚かされる。

分野 自然

地域 浜玉

◎地図・写真・統計資料など



原石の鉄片

（川浪誠氏より）



谷口石切場

（川浪誠氏より）

◎引用・参考文献（出典）

◆唐津市教育委員会文化課資料

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html